

第5回札幌文化芸術未来会議 【グループ②】

開催日時：令和3年6月9日(水曜日)13:00~16:00

当日は、WEB会議システム「Zoom」を使用してグループワークを行いました。

1. 新型コロナウイルス感染症対応に係る文化芸術関係の緊急支援

～コロナ禍における各ジャンルの状況～

◆演劇

- 札幌ではほとんど動いていない状況。公演等、50%解除ができていない。客側も自粛している傾向。助成金等を活用してはいるが、お金をもらうことが最優先で客に見せるクオリティのものを作れているのか。公演すればするほど赤字状態。モチベーションも下がっていく。
- 集団でつくるもの、クラスターを出さないよう密を避けることを考えると満足な稽古ができない。創作自体ができない。Zoomを活用はしているがZoom稽古には限界があり、配信も収益性は低い。
- 学生演劇など、先輩が後輩を育てるような場では公演ができないと現場を通して学ぶことができず、若手の成長もさることながら作り手側が減っていつてしまうのではという不安が強い。
- チケット収入が全くない状況で、キャンセル料の発生が問題となった。

◆美術

- 作家の作品の内容・環境によって状況はバラバラ。美術館等の施設では、展示・鑑賞の機会は減っている。民間のギャラリーは開けているところもある。売上への影響の有無もバラバラだが、アンケート(札幌市文化芸術活動実態調査)結果からは展示機会も収入も総じて減少傾向にある。
- モノをつくって発表するタイプの作家として、輸送費が跳ね上がっている影響は大きい。
- 地域のリサーチをするような作家は現場に行けず活動自体できていない。

◆音楽

- hitaru(札幌文化芸術劇場)での公演50%制限下でも空席が出ている。いつも来ていた人が来ない。感染症への不安が強く、生の演奏に触れたいというマインドが低下している。

◆デザイン

- デザイン業界は広範囲なので個別の状況はつかみづらい。全体的に仕事が減っている状況はある。例えば、文化・商業的なイベントが減ることで広告デザイン、サイン、看板制作、設営の仕事も減っている。表現・発表という直接的なことではなく間接的影響がある。
- コロナを逆にチャンスととらえてビジネス展開する動きもある。ウェブのリニューアル、ECサイト(ネットを使ったモノやサービスの販売サイト)など。
- コロナ後の活動に向けて、デザイン協議会などでも話し始めている。
- 大学非常勤講師(建築・デザイン)としては、次の世代に対する危機感が強い。実技を伴うジャンルをオンラインで教えること自体非常に難しい。学生へのサポート、非常勤の講師に対するサポートが必要と感じている。

◆全体として

- ①「発表」「制作」の機会が減少
 - ②関連する業界の仕事の減少
 - ③「育成」に関する課題
- という3つの視点で対策が必要。

～コロナ禍における必要な支援策～

◆文化芸術活動を生業として持続するための支援

(既存の文化芸術イベントに対する支援強化/札幌演劇シーズン・・・)

- 劇場費の補助があったところで赤字。
- 札幌演劇シーズンは、選ばれた作品が上演できる。演劇で食べたい人が積極的に参加してきたもの。黒字化できる機会だった。そのもの自体が赤字化してしまう企画になっていきかねない。
- 演劇はプロとアマとは分けにくいジャンル、演劇しなくても食べていける人が続けていくことを諦めない、具体的な機会を提供できないか。
- 収入を補う、経費を抑える支援策。
- 飲食店と同じで、「やらせてくれないなら補償してほしい」が同じ。
- 若い人たちのモチベーションをどう持続させるか。

◆再開支援事業の分析・柔軟的な活用に向けた検討

- 施設使用料50%補助は公演系では使われてはいる。条件がわからない人は諦めている。キャンセル料も対象になる。
- 発表の機会に施設使用料が発生しない作家には満足な支援ではない。美術系の場合、施設使用料が発生するのは主に「貸画廊」で、お金を払えば誰でも展示ができる場所であるため、学生やアマチュア、団体展作家向けの場合が多い。その層への補助としては大切である一方、プロの活動への補助は念頭に置かれていない。
- 展示が中止になった場合制作費の補助がない。(企画ベースのギャラリーや美術館などに呼ばれる場合)
- 日程変更によるフライヤーのつくりなおしなども対象にならないのではないかな。
- 「続けたい人」「やむなくキャンセルする人」両方の支援が必要。
- 続けることに対して費用を補填すること。条件の緩和を考えることが大切。補助を受けられなかった「理由」(条件とのミスマッチ)を分析してはどうか。
- 展示会場のお金が出るから、本来の活動とは別に、急ごしらえで展示することを目的設定してしまう、せざるを得ないケースも考えられる。よし悪しあり。
- 柔軟なプロセスに対する支援が必要。
- 美術は会場が限られている。小規模な展示をしやすい貸画廊も減っている。
- 仙台(仙台市市民文化事業団「持続可能な未来へ向けた文化芸術環境形成助成事業」)では、場所と人、グループも対象になっている。若い世代、小さい集まりにも使えるものが良い。

◆申請手続きに柔軟に対応できる「相談窓口」

- 申請自体の手続きに柔軟に対応できる相談体制。
- 窓口はSCARTSにある(相談件数は増えている)。
- 情報発信は札幌市民交流プラザのHPやSCARTSのチラシ。発信が弱い。みんなに伝わる工夫が必要。
- 「誰でも気軽に相談に行ける」「アート民生委員」のような相談体制。SCARTSと連携して企画できないか。

◆教育現場での兼業/非常勤人材への支援

- ・ 非常勤の人たちが大変な状況。
- ・ 機材・インフラ整備も必要。非常勤には研究費がつくわけではない。オンライン授業の準備にも時間がかかるため負担が大きい。それに対しても補償がない。
- ・ 本業を圧迫することもある。オンラインでの疲弊感もある。
- ・ ノウハウを交換しあう個人的な集まりはあるが、誰でも参加できるオープンな情報交換の場をつくってはどうか。
- ・ そこから現場の声を教育担当につなぐことが大切。

◆現場の声をききながらガイドラインを提示

- ・ 施設が閉じたことに対して不満を持っている人がいる。
- ・ 美術館は強制的に閉じてしまうのはどうなのか。
- ・ 最低限、納得できるガイドラインを示すことが必要ではないか。

◆アフターコロナにつなぐ制度・仕組み

- ・ 専門的な補助もあわせて必要。
- ・ グリーンリスタートのように、新たなアフターコロナにつなぐ制度設計が必要ではないか。終わった後にもレガシーとして残る仕組み。

2. 文化政策のアイデアプラン（長期的）

◆次世代型の文化芸術活動への投資創造・メセナ活動の支援

- ・ 文化はお金がかかるもの。行政・個人の努力では難しい。投資する富裕層、企業に対してメリットを考えることはできないか。極端に言えば税制優遇など。日本全体の課題だが地方自治体からモデルをつくれぬか。
- ・ 30代の企業の代表が特に現代アートに投資するなど、近年ビジネス界がアートに注目している印象。文化に対する意識が高い経済領域の人たちに、現実的なメリット(文化支援すると経済的に得になること)をつくっていけないか。
- ・ 他の自治体ではふるさと納税を活用している(京都市など)。
- ・ イサムノグチについても、BUG(ビー・ユー・ジーDMG 森精機株式会社)との関係から札幌の財産となった。
- ・ 現状、北海道では企業のメセナの活動も下火になっている。

◆芸術批評の活性化支援

- ・ 専門的な批評活動をしている人が少ない。
- ・ 東京からの批評家が全国に発信してくれる機会が少ない。主催者が呼ばないと実現しない。評論家を呼ぶための支援があってはどうか。
- ・ 札幌の芸術批評コンペ：市内の展示に対し、道内外からもオープンに批評を投稿でき、旅費＋採用時の報酬を支払うような仕組みをつくってはどうか(京都 HAPS (東山アーティスト・プレイメント・サービス)：京都を拠点に活動するアーティストの支援組織)。
- ・ 札幌ミュージアムアートフェア(芸術の森)の取り組みも賛否両論。そこにも批評が必要。
- ・ 「自分も何かサポートできる」という意味で一般の人からは評価された部分もある。美術館のフィルターを通した新しいフォーマットが必要だろう。

◆文化の「裾野」と「専門性」を育てるプログラム

- ・ 今あるイベントをもっと活性化できないか。
- ・ 札幌演劇シーズンも実際にはなかなか食っていけないものにはなっていない。
- ・ 札幌では趣味の範囲で活動している人も多い。「文化でめしを食う」ことをメッセージとして訴え続けることが必要。
- ・ アートステージについて、学生の選抜展、子どもワークショップに企画が寄っている。文化芸術への親しみだけでは成熟したものにならない。
- ・ わかりにくい・専門的なものを伝えることも大事。
- ・ 専門性が高くなることで、収益・対価のアップにつながる。
- ・ ヨコとウエの視点が必要、頂点を高く持つことが裾野を広げることになる。市がどこの高みをめざすのか。創造都市として他とは違う何を目指しているのか。特化することなくすべての分野にばらまきになっては、効果が薄くなる。
- ・ 美術分野では、SCARTS・札幌国際芸術祭の取り組みは評価されていると思う。
- ・ 社会の中で新たな取り組みをすること自体が議論を活性化。社会に何が波及しているかしっかりとらえる必要がある。
- ・ SCARTS：2018年にオープン。開館当初は祝祭的な意味合いで予算も多いのが普通だが、3年経って予算が平準化されていくことが想定される。あまりに絞るとただのハコになってしまう。独自企画の自主公演の質を落とさないことが重要。
- ・ 業界のヨコのつながりがどれだけあるのか。
- ・ 「札幌は文化的」というにはどのような状態か。身近な芸術活動の層も大事。両輪が文化的な世界をつくる。一般の人を取り残さないものも必要。
- ・ 高齢者のサードプレイス：文化活動を通して健康、他の広がりを持つ。経済効果についてもつなげたい。
- ・ 国内外の文化事業取材、専門性向上プログラム：例えばドクメンタ(ドイツの現代美術展)など、観光・経済効果も生んでいる。札幌国際芸術祭についてもその背景を知ることが必要。

◆教育と文化の新たな連携施策

- ・ 「鑑賞授業」が変わってきている。文化戦略の中での位置づけが必要。
- ・ たとえばイギリスでは中学校で演劇を取り入れており、他者を演じることで多様性を学ぶ、公演会をすることで公に評価されるなど、意図がハッキリしている。ただ学校で受動的に鑑賞させたり、演じさせたり、自由に体感するようなやり方では意味が薄くなる。やるならば、その意図と、文化に触れる命題を教える側が意識できるか。
- ・ 文化庁と教育委員会の連携、文化側から教育へ、アウトリーチ・鑑賞・ワークショップを押し込んでいく力が必要ではないか。
- ・ 教員個人のキャラクターにもよる。先生の意識による。
- ・ 教育機関へのアーティストの生活理解プログラムのような施策があると良い。

◆表現・創造活動を生み出すまちの場・仕組みづくり

- ・ まち全体で表現活動しやすい環境整備を。札幌に住むと安価で文化活動ができる、白い目で見られずのびのび表現できる、面白い文化関係者や展示公演が集まっている、質の高い表現活動に見合う対価が支払われる、というような状況や印象を作れるか。市自体がそういう街になりたいと考えているか?→多様性の尊重に直結するはず。
- ・ 活動スタジオの提供・斡旋ができると良い。
- ・ これを札幌の特殊性にしていく、移住の動機にもつなげる。
- ・ さっぽろ天神山アートスタジオも外部から評価されている。

- ・ 「アートカフェ」のような存在、「芸術居酒屋」のような多様な人が集まる場づくりが必要。人のつながりが生まれる場（過去にあった OYOYO のように）。
- ・ 市役所の 1 階につくってはどうか。「カフェ」は人をつなぐイメージがある。
- ・ なえぼのアートスタジオのような場所の例。音を出せる、壁に穴をあけて OK、文化関係者が集まる、自由度の高い制作環境。逆に現状復帰、壁穴 NG など言われると借りづらい。
- ・ エリアの魅力やまちづくり活動を支えるような行政の応援策があっても良いのでは。
- ・ サブスクリプション家賃（たとえば 1 年契約すれば最初の 3 カ月分無料）のような、とっつきやすい仕組み。チャレンジを支えるような家賃補助制度。
- ・ 演劇ではそもそも稽古場が少ない。昔は稽古場助成（3 年程度）があった。
- ・ 演奏場所・楽器置き場として保育園を借りていることがあった。
- ・ 公衆トイレを建築家がデザインするプロジェクト（渋谷区内の公衆トイレを改修するプロジェクト「THE TOKYO TOILET」）がある。一般の人たちが日ごろ使うものに文化芸術が働きかけていくことで社会にひろがる。
- ・ 「デザイン思考」「アート思考」、新たな価値を切り開くためには文化芸術の人たちのような多様な発想も必要。様々なプロジェクトのメンバー構成に。
- ・ 投資活性化：消費者をつくっていくことが大切。芸術を理解し、芸術が好きな人等を作らなければならない。アウトリーチは学校だけではない、会社等のビジネスパーソンを対象とすることも考えられる。
- ・ 批評家への支援：創造性・芸術性の高い芸術活動を支援する制度も併せて整備する必要。総合的に考えることが大事。
- ・ 行政の中にアート思考・マインドを取り入れることも有用ではないか。